

日英翻訳のニーズは 輸出に連動して増大する

翻訳の需要は日本の対外貿易の動向や海外企業との関係に大きく左右されるため、日英・英日翻訳の比率や、日英翻訳の需要が高まる分野などは、常に変動しています。では、ここ最近の需要傾向はどのようなのでしょうか？また、日英翻訳のスキルを磨くためにはどうすればよいのでしょうか。アメリカ協力企業に取材をしてご意見を伺いました。

日英翻訳の需要は増えている？

1964年に創業し、およそ半世紀のあいだ翻訳業界を見続けてきた株式会社ジェスコーポレーションの丸山社長に日英翻訳の需要の変化について尋ねてみました。

「弊社が主に受注する技術系に関しては、1960年代の日本の経済復興期には輸出が増えて日英翻訳が主流でしたが、その後、ITなど輸入が増えると英日翻訳が増え、ここ最近では中国向け輸出が伸びて再び日英翻訳が増えるなど、時代によって波があります」

現在、現役で活躍している日本人の日英翻訳者は、1960～80年代に翻訳の仕事をはじめた方で、年齢でいうと40代後半から70代の方が多いそうです。一方、現在20～40代前半の翻訳者が仕事を始めた頃は英日翻訳の案件が多く、その流れに乗って日英は手がけずに来た、という方も少なくないそうです。

「翻訳会社もそうですが、翻訳者も長く続けていきたいと考えているなら、絶対に日英翻訳をやるべきです。30年も業界にいれば必ず波がやってきます。円高になっても円安になっても時代の流れに対応できるようにしておいたほうがいいでしょう」

(丸山社長)

[アメリカ協力会社に聞きました]

分野別、日英翻訳のニーズは？

どのような分野で日英翻訳の需要があるのか、またその分野で日本語ネイティブが活躍できる場があるのか、アメリカ協力会社に尋ねました。

<技術> アジア向け輸出の増加で増える日英翻訳

株式会社ジェスココーポレーション 代表取締役 丸山 均さん

創業以来、技術翻訳を中心に受注している弊社ですが、優秀な日英翻訳者は常に足りません。それは日本人翻訳者であっても、英語ネイティブ翻訳者であっても同様です。

戦後一貫して翻訳需要は伸び続けていますが、時代によって求められる分野は変わってきました。1970年代前半のオイル・ショック以降、日本の花形産業はそれまでの「重厚長大」から、半導体に代表される「軽薄短小」時代に構造転換していきます。それに伴いコンピュータ・通信・半導体を中心とする電気、電子、機械およびソフトウェアなどの貿易が活発化していき、日英翻訳の量もうなぎ上りで増えていくこととなります。また、80年代後半からは、それに上乗せする形でITソフトウェア関連の英日翻訳が加わり、活況を呈します。しかしそのIT中心の日本経済も今世紀初めに起きたITバブルの崩壊により、曲がり角を迎えます。現在ではアジア市場をメインターゲットに据えた日本の産業構造そのものに地殻変動が起きていることはもう周知の事実です。

それでは、アジア諸国との貿易量が増えているのであれば、英語の翻訳は減っているのではないかと、という決してそんなことはありません。日本語からアジア言語への翻訳が増えているのは事実ですが、日本語から英語への翻訳も同時に増えているのです。特に技術文書の場合、英語という「世界共通言語」のほうが、より早く、より安く、より正確に、翻訳できるケースが多いからです。中南米、ロシア、中東、アフリカへの輸出に対しても同様のことが言えるでしょう。

ところで、日英翻訳の場合「ターゲット言語となる英語のネイティブが翻訳をするべきだ」との声も聞かれますが、私たちは必ずしもそれがベストだとは考えていません。

なぜならば、原文の日本語がいつも「正しい日本語」、「わかりやすい日本語」で書かれているとは限らないからです。それは「文脈上推定可能な主語は省略する」という日本語本来の特徴に加えて、「文章を書く」という訓練を徹底的に軽視してきた日本の戦後教育にも関係があるようです。

そのためかなり高度な日本語理解力を持つ優秀な英語ネイティブであっても、正しく理解できずに誤訳をしてしまうというケースがしばしば見られます。正確な日英翻訳をするためには、日本語の行間を深く読み込む、熟達した文章理解力がどうしても必要となるからです。さらに、原文が「技術文書」の場合、内容を理解するためには、その分野の技術知識が不可欠となります。

実際、日本人顔負けの日本語理解力を持つ優秀な英語ネイティブが存在することも事実ですが、その数はそれほど多くありません。そこで英語ネイティブよりも数が多く、結果としてさまざまな技術分野をカバーできる日本人翻訳者が中心となり、おもに文章のブラッシュアップを担当する英語ネイティブチェッカーとの組み合わせで翻訳するケースが断然多くなります。大量短納期の仕事をこなすためにもこの組み合わせが必要です。

従って日英翻訳の場合、日本人翻訳者と英語ネイティブ翻訳者のすみ分けは当分変わりなく続くだろうと考えています。